

毛皮のトルコ帽をかぶり、シューバの襟を立てて歩く父、酒を飲んでチャイナ節を歌っていた父、そして「日露貿易」「日貨普及」を志して渡満したが、志半ばで亡くなった父、鎮魂の情、切なるものである。

最後に、中国の連句を記して私のつたない引揚
勞苦記録を閉じる。

「浮雲長長長長消」 人の命

（人の命は空に浮かぶ雲のようなものだ。生まれては大きくなり、また生まれては大きくなるが、いずれは死んでゆく）

「海水朝朝朝朝朝朝落」 人の運

（人は運を、朝起きては天に祈り、また朝がくれば祈るがしかし運は結末を迎える）

合掌

大陸の花嫁

京都府 井筒 紀久枝

一 決意

私は大正十（一九二一）年一月十八日生まれたが、自分の父親を知らない。母は、不倫をしたのか強姦されたのか知らないが私を生んだ。母は赤ん坊の私を連れて、隣村の貧しい継子のある家へ嫁いだ。そこは福井県今立郡岡本村大滝、現在の今立町、越前和紙の産地である。その家も紙を漉いていた。母は、私という連れ子をしてきたひけめと、見たこともなかった紙漉きを覚えなければならず、気苦労があったと思う。

私は、十歳年上の継兄にいじめられ、養父に睨まれ、また母のストレスが私に集中し、身のおきどころがなかった。私が三歳のときに妹が生まれた。そのころ母は、紙漉きには必要な「ネリ」に

かぶれて手が真っ赤にただれ、もう紙を漉く桁が持てなくなった。

養父は紙漉きを廃業して、大八車を買ひ青物の商いを始めた。が、それはうまくいかず今度は豆腐屋を始めた。それは母のほうが早く覚えたが、借金はかさむばかりだった。私は、両親が借金取りに拜むようなかたちになってあやまっているのを見るのは、幼心に嫌だった。

私が小学校に入る年、二人目の妹ができた。私は学校もそこそこに、子守と家の手伝いをしなければならなかった。四年生のとき三人目の妹が生まれた。五年生のとき養父が中風になり寝たきりになってしまい、母は看病をしながら豆腐屋を続けた。私は学校から帰ると、たとえ一時間でも近所の製紙工場へ働きに行かされた。十時間勤めると十五銭の給料がもらえた。こうして私は尋常六年を卒業した。五十銭の卒業写真は買ってもらえなかった。学校の通信簿にはいつも「栄養丙」としてあった瘦せっぽちで背の低い、教え十三歳の

私は製紙女工になった。一日十時間働いて二十五銭の日給で、月に一日と十五日の二日しか休みはなかった。冬の紙漉きは冷たい。私は、特に凍傷がひどくて、ただれて十一月ごろから五月ごろまで治らなかつた。苦しい仕事だった。

私が十六歳のとき養父が亡くなった。そのころは二歳下の妹も私と同じ工場に勤めていた。養父は、その工場主と家と敷地を抵当に入れて七百元の借金をしていた。七百元といえば大金だった。私たちが母子、姉妹は住んでいる家を取り返すため必死だった。十年の期限がくるころ、ようやく七百元のお金ができたので、母は工場主に返しに行った。ところが工場主は、私のことを、自分の落とし胤ななである同じ工場に働いているMの嫁にしてくれたら、もうそんな金はいらぬと、言い出した。私は、私とよく似た境遇にいるMにいくらか好意をもっていただけだが、母は、「娘を七百元で売ったりはせんわい！」と、頑として聞き入れなかった。それで家も敷地も取り戻すことはできな

いままだった。

時は日支戦争のさ中、太平洋戦争が始まるころまで、工場での私は皇后陛下が「譽れの家（戦死者の遺族）」へ下賜される色紙を漉いていた。その色紙には、「やすらかに眠れとぞ思う君のため命捧げしますらをの友」と、記されるのだった。

そのうちに村の中央に大きな製紙工場が建った。それは大蔵省管理下の紙幣抄紙部だった。近郷の学生たちが徴用され、村にいくつもある製紙工場からもそれぞれ数人の紙漉き工が出向した。

私もその中の一人で、紙幣を漉いた。私の凍傷はひどくなり、心は重かった。月に二日の休日には、女子青年団として小学校の校庭で教練があった。在郷軍人の指揮のもと、厳しい叱咤号令の中、木銃を肩にした私たちは校庭を行進した。そして「エッエッヤァ！」大声をあげて藁人形を突いた。そのあとは校長先生の時事訓話で、大陸進出のことや、いいことづくめの満州の話だった。

昭和十八年一月、思いつめていた私は、並んで

寝ている母の背中をつぶやいた。「おっ母、うら、満州へ行く！」まだ眠ってはいないはずの母は、何も言わず背中を向けたままだった。母と私はそれまで会話が途絶えていた。家を取り戻せなかったわが家は、母子五人ながら会話がはずむことはなかった。「おまえ、ほんとに満州へ行くつもりかえ」朝、母が囲炉裏の火をかきたてながら口を開いた。私はその囲炉裏端で、一晚中ずきずき痛んでいた凍傷の手に、薬を塗り包帯を巻き換えていた。「うん、満州へ行く。もうこんなところにいたいとうない」私は、それ以上言えば、声をあげて泣いてしまいたいそうになった。

私はその夜、校長先生に手紙を書いた。満州へ行って、少しでもお国のためになりたいという意味の手紙である。校長先生は直ちに県庁へ行つて、福井県から満州開拓に行っている独身青年の名簿を取り寄せてきた。そこには十人あまりの出身地と氏名が並んでいた。「おまえは行ってしまいうけど、これからは家同士のつきあいもせんなら

んし、近いとこの人がいいやろ」と言う母の意見に私は従った。選んだ相手は、わが村と同じ今立郡から行っている満州開拓青少年義勇軍の一人だった。見合いもせず写真も見ず、見ず知らずの人を夫に決め、私は「大陸の花嫁」になった。義勇軍の彼は、話が決まると家族招致のために満州から帰国した。

昭和十八年三月十五日、結婚式。「欲しがりません、勝つまでは」の時代。何もかも配給制、切符制だった。私の花嫁道具は柳行李一つ。花嫁衣装は国防色（カーキ色）の当時の標準服（筒袖の上着にモンペ）を着て、白足袋に足駄履き。花嫁らしさといえ、パーマ気のない束髪に小さな白い羽根のかんざしだけだった。式は男のほうの氏神様で行われた。式場には、県知事代理、私と男のほうの両村の村長、校長、そして青年団長が並んでいた。みんな、国民服、戦時服で国防色一色だった。

四月一日、満州へ旅立つ日、武生より遠くへ

行ったことのない私だったが、軽便鉄道の停車場では、出征兵士のように村の人から送られた。母をはじめ身内の者や、親しい友人は、武生駅まで見送ってくれた。私が乗った汽車は黒い煙を吐き、汽笛を鳴らして発車した。見送りの人の中にいた母が、両手をあげ顔をくしゃくしゃにして、汽車を追いかけ、ホームを走っていた。「おっかあ！ おっかあ！」と私は心の中で叫んでいた。そのときの母の顔や姿は、私の脳裏に焼きついた。私のことで家を取り戻せなかった母の悔しさを思い、いつかはこの母も満州へ連れて行こうと思っていた。将来は二十町歩の耕地が与えられることになっていたのである。

北陸線はトンネルが多い。兵隊輸送優先の汽車は座る席はなく、私は煙に咽び、涙に咽んだ。私の顔は、汽車が吐き出す煙の煤と涙で真っ黒になっていったと思う。私の夫になった彼は、そんな私をねぎらうつもりなのか、新婚旅行のつもりなのか、先へ急げばいいものを大阪で一泊した。風

光明媚な瀬戸内海沿線は、軍の要塞地になっていた。山陽線の汽車の窓は遮断されていた。下関では関釜連絡船に乗り遅れて寒い夜を埠頭で明かした。

関釜連絡船では魚雷に備えて、救命具を着け八時間の船酔いに耐えた。そのころ、この対馬海峡や朝鮮海峡はたびたび魚雷による遭難があった。釜山でまた一泊。釜山から乗った汽車は、日本国内の汽車より車内が広くてゆったりしていた。釜山から朝鮮半島を縦断し、鴨緑江までおよそ一昼夜かかった。鴨緑江を渡ると安東、そこはもう満州国だった。ハルビンで降りて一泊した。

故郷を発って五日が過ぎていたが、思えば遠くへきたものである。しかし私がこれから行く所は、さらにさらに遠いチチハルの、そのまた奥地だった。ハルビンから乗った汽車は走っても走っても荒野の中だった。夫は詳しいことは言わなかったし、私も聞かなかつた。二人は何日も一緒に旅をしながら、うちとけた会話はしなかつた。

私は、満州へ行く決意はしたが、チチハルがこれほど遠いとは思わなかつた。自分の行き先ぐらい、もっと調べておけばよかつたと後悔したが、後の祭りだつた。

やっと着いたチチハルは猛吹雪だつた。「チチハル開拓会館」という所へ行つたが、ここはチチハル以北に行く開拓団員の宿泊所だつた。

雪のチチハルではあつたが、四月といえば北満も解氷期である。結氷期は嫩江をトラックで渡河し、夏期は船で渡るといふ近道があるらしいが、この時期はそれが駄目だつた。荒野は泥濘だつた。満馬三頭引きの大車は車輪が半分以上も泥濘に沈み込み、三頭の馬は鞭をあてても喘ぐばかりで、車は動かなかつた。樹木一つなく、東西南北の地平線が曇り空の中にぼやけて見えるだけだつた。男たちは、通り過ぎて来た中国人の集落へ引き返すことにした。女は私一人。歩けたものではなかつた。私は夫に庇われながら、満州の気候風土を知らなすぎた自分を思った。集落といつて

も、泥を固めたような家が四、五戸かたまっているだけだった。男たちはその家へ入り込み、宿と食事を頼むというより当然のように強要した。私はこのとき、日本人の傲慢さをかいま見た気持ちだった。その人たちは、日本人怖さに一生懸命もてなしてくれたのだろうが、その不潔さに、私は食事が喉を通らなかつた。また便所らしい所はなく、家の裏で用を足さなければならぬ。誰も見ていないが恥ずかしい思いで用を足そうとする、豚小屋から何頭もの豚が出てきて排泄したあとから始末してしまう。そんな所に二日ほどいたらトラックが迎えにきてくれた。その中に私と同じ今立郡出身の人がいた。「ようこんなどこまでこまったのお！」と、故郷言葉でねぎらわれたときは涙が溢れた。

二 満州開拓団

昭和十八年四月十二日の夕方、「第九次興亜開拓団本部、第一次興亜義勇隊開拓団本部」と、門柱の両側に大きく記されている所へ、私たちの

乗ったトラックは入って行った。私はまず義勇軍指導員の山田先生の宿舎へ挨拶に行った。先生には夫人と子供がいたが二十代の若さだった。義勇隊集落は、本部よりさらに五キロメートルほど行かなければならなかつた。満州の真つ赤な夕陽に照らされて、私は大車に揺られていた。

私の新しい住所は、「満州国龍江省甘南県拉哈^{ラハ}弁事所気付、第一次興亜義勇隊開拓団」であつた。チチハルから二百キロメートルほど奥地。遙か西北に連なる大興安嶺を望み、地平線が見渡せた。隊員三十人ほどの宿舎は、一棟二世帯のものが十棟並んでいた。その年、花嫁を迎えたのは年長者で二十四歳の四人、義勇隊開拓団では、私たちが最初の女性入植者だった。共同生活で共同炊事である。困難を極めたのは水くみだった。柳の枝で編んだ籠のようなものが、覗いても水面が見えないような深い車井戸にぶら下がっていた。重たい車を回してくみ上げても、水は半分ほどはこぼれてしまう。何回もくみ上げて天秤棒で運ばな

ければならなかった。便所は穴を掘って二枚の板を渡し、屋根やまわりは野草で囲い、出入口には筵むしろがさげてあった。ときどき放牧の豚や馬に覗かれた。

五月になると農耕が始まる。私の背よりも高く大きい馬や、牛が怖かった。男たちは、怖がっている私たちに、馬具の付け方、扱い方、そして農具の扱い方を教えてくれた。八百メートルも千メートルもある長い畝、広い畑地。男たちは馬に犁すきを引かせて耕していく。黒々と掘り起こされる畝の上へ種を蒔いていくのは私たち女性だった。

六月の野原にはすみれ、たんぽぽ。芍薬、桔梗その他、日本の春、夏、秋の草花が一斉に咲き競った。肥沃な大地だが、雨期になると粘土状の土が靴の裏にくっつき、歩けたものではなかった。雨期が終わるとかんかん照りの夏、夜は短く昼は長く、作物は一日に二十センチメートルも三十センチメートルも伸びた。長い畝を男女が並んで除草した。馬草も刈った。そして昼寝もした。

開け放した家の中へ、放牧の馬や牛が顔を覗かせたり、豚や鶏が入ってきたり。遠くで狼が吠えれば犬の遠吠え。そんな日々だった。

八月の末には霜が降りる。短い夏の間立派に実った穀物や野菜を収穫する。その忙しい仲秋のころ、太陽が大きく西の地平線に沈むと同時に東の地平線に大きな月がのぼってくる。空の狭い山村に育った私は、しばしその光景に見とれていたものだった。

そして三寒四温の冬、四温といっても零下二十度、三十度。三寒になると四十度も四十五度も下がる。天と地が灰色ひとつになって灰のような粉雪がふぶく。防寒具に身を固めていても目が凍り息が凍り、防寒帽から氷柱が下がる。靴は地に凍りつく。井戸端は氷の山になり、便所も氷の山になる。四温の日は大車を連ねて燃料にする枯草を刈りに出た。また、近くの現地人の集落へ遊びにも行った。纏足てんそくの女たちは「ライライ、ライライ」と歓迎してくれた。

昭和十八年頃の開拓地はまだまだ平和だった。明けて昭和十九年、義勇隊から私たち夫婦は本部の農場へ、農耕と畜産の指導を受けに行くことになった。将来は一世帯に二十町歩の耕地が与えられる。私は一年間の研修を終えて義勇隊集落へ帰ったら、と夢をふくらませていた。他の二組の夫婦には二世が誕生した。花嫁を迎える隊員もあつた。

ところが二月になると、開拓団に大量の召集令状がきた。義勇隊では指導員の山田先生、夫人が産褥中の大坂さん、新婚早々の内田さんたちが召集された。

農場へ来ていた私たち夫婦は、いずれくるであろう召集令状にびくびくしながら、鷹西指導員御夫妻のもとで働いていた。農場では苦力二人と小孩一人を雇っていた。夫は苦力二人を相手に馬や牛を放牧しながら、燃料の野草刈りをしていた。私は夫人から畜産の指導を受けた。乳牛の搾乳も教わった。牛のお産の介護もした。難産でその牛

が死んだときには、私の胎内では胎児が動いていた。そのうち五月になり農耕を始めようとしていたころ、またまた大勢に召集令状がきた。夫にも鷹西先生にも。農場の宿舎は中国人の家屋を買収したもので、その半棟にはまだ中国人の家族が住んでいた。鷹西夫人は華奢な人だったが、その後も私や苦力を従えて農耕をやっていくつもりでおられたが、鷹西先生が健康体ではないということで兵役免除になり戻って来られた。先生は面目なさそうだったが、夫人は喜んだ。それから一カ月も経たないうち、先生は高熱におかされた。本部の診療所には医師はおらずに、若い看護婦一人だけだった。何の病気かも分からないまま、夫人と私は熱を下げることに努めたが、看病のかい無く鷹西先生は亡くなった。夫人はそのお骨を抱いて、出身地の北海道へ帰って行ってしまった。たった一人で中国人ばかりの中へ残された私は、身重の体で義勇隊集落へ戻って行ったが、私の身を案じた故郷の母は、妹を寄越してくれた。

昭和十九年八月二十日、私は女兒を出産した。先に看取った牛と同じく難産だった。子供には、清く美しく育ってほしいとの願いから、清美と名付けた。そして、自分の父親がどのだれかも知らないでいる私は、わが子にだけは、しっかり父親の存在を教えておこうと思い、その写真をお守りのように身につけさせた。

「清美のおとうさんはこの人やで」と、私は毎朝言い聞かせていた。召集令状は開拓団の男たちを次々と戦争に駆りだし、それでも「大陸の花嫁」になってくる人があった。女たちは身ごもり、医師もいない開拓地は女と子供ばかりになった。

昭和二十年、女と子供たちばかりの中に残ったのは隊員三人。そうした中にも五カ年計画が進められていた水田工事が完了した。空き家になった義勇隊員宿舎には白系ロシア人が寝泊まりしていて、トラクターで開墾していたし、水路工事は中国人苦力がしていた。広大な水田で、私たちは田

植えをやり始めた。この水田作りのため、近くに朝鮮から来た人たちの集落があった。義勇隊に大勢の男がいたころは、その人たちにずいぶん無理難題をふっかけたものだったが、私たちはその人たちのやりかたを真似て、粃のばらまきをした。

治安は悪くなり、馬や家畜が盗まれるようになった。七月になったある日、開拓団上層部からの視察があった。治安が悪くなった開拓地の、それも本部から遠く離れた所で若い女性ばかりでいるのは危険だということで、本部へ集結するように命ぜられた。

私たち第一次興亜義勇隊の者は、第九次興亜開拓団の人たちと行動を共にすることになった。興亜は福井県出身の者ばかりだった。ラジオもなく新聞もとらず戦況は何も知らなかったが、八月九日のソ連との開戦は知らされた。そして八月十四日、残っている男は総ざらえのように召集された。だが、その人たちは、わけの分からないまま八月十五日には帰って来た。

私たちが日本の敗戦を知ったのは十七日だった。敵国の真っ只中で祖国の敗戦を知らされた私たちの間では、いろいろな意見が飛び交い、自決組と、自決反対組とに分かれた。国民学校校長の坂根先生は、自決組の先導者だった。先生の教え子や義勇隊の若い女たちは坂根先生に賛同した。生きていて敵から辱めを受けたり、殺されたりするより、自分の意思で命を絶とうと思ったからである。

八月二十日に、学校へ集まって坂根先生の銃で殺していただき、石油を校舎に撒いて、最後に先生が火を放つことになっていた。その日は清美の満一歳の誕生日だったが、私はその短い命を詫びながら、死支度を整え、午前十時を待っていた。ところがその直前になって、自決反対組の団長や年配の人々が、自決行動を妨害に来た。私たちは反論したが、今後、避難場所にしようと思っっている学校を焼くことは許せぬと厳しく言われたので、集団自決はできなかつた。しかし翌日、坂根

先生一家六人は、教員宿舎で自決を実行した。先生夫妻と子供二人、先生の妹二人であった。私たちは、先生一家の死を見送るため、教員宿舎の前に並び「君が代」を歌い、固唾を呑んで銃声を聞いていた。

八月二十五日にはソ連軍が進駐して来て武装解除が行なわれ、夫たちが残っていた小銃、幹部たちが持っていたピストル、日本刀をことごとく取りあげられた。ソ連兵が、開拓団の倉庫を封印して行った。それからは、毎日毎日、ソ連兵が威嚇射撃しながら私たちの宿舎へ乱入して来て、金目の物を略奪したり女を漁ったりしていた。私たちは、髪はざんぎりにして、顔には竈の煤や泥を塗りたくって子供を負い、野菜を貯蔵する穴蔵に潜んでいた。中国兵も来た。ある日、中国兵にどこかに置き忘れていた葉莖を見つけられて、「まだ武器を隠しているだろう？」と言って執拗に問い詰められたが、その応対にでた義勇隊指導員山田先生の夫人で、私たちは姉とも慕っていた山田

夫人が、あつという間に銃殺された。夜になると
匪賊が襲って来た。団の勝手を知った原住民だつ
た。私たちは、長い草刈り鎌や手製の槍を持って
夜警に立った。「ワァーッ！」と襲って来ると、
私は槍を投げ出して子供を預けている方へ走つ
た。暗がりの中でわが子を探して背負い、みんな
同じ方向へ逃げた。それを目がけて弾が飛んでき
た。倒れる者、捕らわれる者、私はいつも高粱畑
へ逃げ込んでいた。清美は声もたてず体を固くし
て、私の背に顔をくっつけていた。ある夜、私は
正門の夜警に立たされて、寒さに耐えながら立っ
ていると、東と西にとろとろと狼煙のろしがあがった。
わが団を襲う合図かもしれない。今ここへ「ワ
ァーッ！」と言って襲って来たら私は殺される。
わが子を残して殺されなくなかった。しかし、そ
の夜は呉山の山形県出身者の開拓団が襲われたの
だった。一望千里の広野に見えたが、火の手があ
がると右往左往する人影が手に取るように見え、
自分が襲われる以上に怖い無気味な夜警だった。

十月九日、近くに住む朝鮮人が本部へ来た。
「毎夜襲われているのを見てかわいそうになった。
今夜から銃を持っている私たちが警備にたつてあ
げよう」ということだった。幹部たちは、なけな
しの物を出し合つてもてなした。私たちも、夕方
帰って行く彼らに「お願いします」「お願いしま
す」と、正門から出て行くのを見送った。とそれ
と同時に四方から「ワァーッ！」という喚声と銃
声が起きた。不意をつかれた私たちは、多くの人
が殺されたり捕らわれたりした。高粱畑へ逃げ込
んだ私のそばへ、血みどろの人が倒れ込んだ。
「やま」「かわ」合言葉で団の人と分かった。私は
非常袋から手ぬぐいを出して、その人の腕の傷に
巻いた。私の防寒服はその人の血で染まり、ズボ
ンは引っかけ破れ、清美を負うている背には小さ
な亀の子布団だけだった。宿舎は全部焼かれ、学
校も焼かれた。学校の天井裏には病人や怪我人が
匿われていたが、「うちの人があ、うちの人があ」
と、燃え盛る学校に向かって泣き叫んでいる人も

いた。その夜は明けた。入る家はなく、食糧も着る物も奪われ尽くし、殺された人を集めて土をかぶせ、杲然と立ちすくんだ。こうして、興亜開拓団は滅び、幕がおろされた。

団長が私たちを見捨てたのか、残った者が団長を見限ったのか分らないが、団長は二、三人の人と一緒に私たちとは反対の方へ去って行った。私は大勢の方へついて行くしかなかった。数人の男について、女と子供と怪我人の行列。十月ともなれば、もう零下の真冬だった。

私たちが助けを求めに行った所は、福岡県と大分県の出身者でできている興隆開拓団だった。この団も各自の家を引き払い、本部に集結していた。食糧や物資も残っている筈はなかったが、それなのに山本団長は、私たちを受け入れてくださった。一つの宿舎に何家族も入っていた。その中へ数十人が割り込んだのだから、寝返りもできないほどのぎゅうぎゅう詰め。そこで与えられた麻袋一枚が、私たち母子姉妹の寝具になった。風

呂場はあったが、私たちにまで順番は回ってこないし着替えもないので、虱と蚤シラミがうようよと殖えていった。再三、チチハルへ逃避しようという意見が出たが、山本団長は「酷寒に向かっている行動は犠牲者を出すばかりだ。ここで越冬しよう」と、自分の決断を揺るがさず、六百人ほどを統一した。男一人に女、子供数人を入れて班をつくり、小隊を組み、朝の点呼のとき、それぞれの役割が決められた。男は警備、食糧の調達、女は燃料の野草刈り、稲刈り、脱穀、炊事、子供は幼児の子守など。調達してきた食糧を班だけで分けようものなら、敵しいリンチを受けなければならなかった。殺された人もある。

相変わらずソ連兵や中国兵が乱入して来た。ある日、中国兵が入って来て、男女別に閉じ込めた。私たちが閉じ込められた所に、病気で寝ている男の人がいて呟いていたが、「俺らも上海で女、子供を閉じ込めて火をつけたなあ」と、昔のことを思い出していたようだ。その報いで、私たちは

今焼き殺されると思い、私は清美を抱きしめ妹と抱き合っていた。その日、私たちには何事もなかったが、団長はじめ数人の幹部が拉致された。三日目に帰されたが、ひどい拷問に遭ったらしい。私たちの小隊長は帰って来るなり自決した。

警備体制は厳しくなり、夜間、思いがけないときに非常呼集があつた。後追ひして泣く子にかまけていると、槍を持った警備隊長が怒鳴りに来た。「子供は処分してしまえ、突き殺すぞおっ！」とわめいた。わが子に心を残して警備に立った。靴は地に凍りつき、槍を持つ手は凍り、涙が凍った。天を見上げた。天は下界に何が起きようと、月はこうこうと輝き、星は満天にきらめいていた。酷寒と栄養失調で、子供も大人も死んだ。そんな中、ソ連兵や中国兵に狙われる娘たちを偽装結婚させることになった。私の妹は、警備隊長M氏の息子と組むことになった。それで、私たち母子もM氏の家族ということになり、一つの班になった。

そうしているうちにも月日が過ぎて、昭和二十一年春になった。春になったらチチハルへ出るのは、みんなの願いだつた。一人の犠牲者も落伍者も出ないようという団長の意図から足の鍛錬が始められた。夕方の点呼が終わると、壕の内回りを今日は六周、明日は八周と、子供を負ぶつた女と子供たちが歩いた。

五月十三日、興隆開拓団をあとにした。病人には金を出し合つて大車を雇つた。早く日本へ帰りたい、少しでも故国へ近づきたいの一心だつた。それなのに、西沢千代子さんは、「うちは満邦みっぽうを負うてチチハルまでは歩けん」と、チチハル行きを拒み、十人ほどの孤児とともに、中国人集落、火梨地ホリヂに残留した。

三 彷徨

チチハルへ向かう途中、中国兵に囲まれ、降伏の姿勢をとると体じゅうを調べられた。そうこうして一日約五十キロメートルほども歩いた。靴は破れ、足裏に血豆ができ、膝が突つ張つて曲がら

なかった。その体を蒙古人の馬宿を借り、馬の足の藁の中で休めた。二百キロメートルあまりを四日足らずで歩いたことになる。チチハルは、北方からの難民で溢れていた。私たちが収容された所は元関東軍倉庫だった跡で、その周囲には解凍し始めた死人が山になって積んであるのが見えた。

収容所では、日に二回うすい高粱粥の支給はあったがそれだけでは生きていけず、栄養失調になりさらに虱による発疹チフスが蔓延し出して、日に何人もが死んでいった。孤児が売買されることもあった。私は、こんな所においてはとても生きては帰れぬと思い、職を求め食を求めて街を彷徨した。土方のようにトーピーズ（土で作る煉瓦のような物）作りをしたし、嫩江の中州で魚取りもした。が、長くは続かなかった。本当は住み込みで働きたかった。八路軍が、子連れでもいいからということ、縫製工に雇ってくれた。そこは昂々溪コウコウケイという所で、チチハルより少し南である。

少しでも故国へ近づいたと思った。しかし三日目になると、ハイラルへ北上するという。食事は兵隊と同じように与えられていたが、私は行きたくなかった。「我不去ウオプチユイ、我不去ウオプチユイ（私は行きません）」と言って私は清美を抱き、座り込んで動かなかった。すると、八路軍の兵隊が私に銃を向けた。私は殺されると思い、母子一緒に清美を抱きしめていた。チチハルから来た十四、五人の女たちは、兵隊たちにせかさながら駅へ向かっていった。子連れ仲間の私たち三人は列の最後尾につき、兵隊たちの隙を狙って飯店に逃げ込んだ。その飯店は、昂々溪へ来た日、八路軍の将校に招待された店で、太々タイタイ（奥さん）が日本人だったからである。太々は私たちを匿ってくれた。そして、中国人のその夫は、私たち三人のチチハルまでの路銀まで恵んでくださった。

チチハルへ戻った私は、日本人会が難民の職業斡旋をしているのを知った。子連れの住み込みは乳母の口しかなかった。清美はやがて満二歳にな

る。十分食べさせてもらえたとしても、私に母乳が出るだろうか、とも思った。連れて行かれた所

は、チチハル市の西門を出た郊外だった。私を

雇ったのは李錫全リシヤゼンという人で小学校の校長をし

ていて、太々は阿片中毒者だった。子供は敦華トシヅマ

という生後四、五カ月ぐらいの女の子だった。ほかに

八十歳の老太ロウタイと独身の兄がいた。その兄も勤め

ていたが、炊事をまかされていた。私の母乳が出る

ようにと三日にあげず、肉まんや餃子を作っ

て、私たち母子に食べさせてくれた。太々は毎日

寝ころんで読書していたが、ときどき「アイ

ヤア、アイヤア」と言って苦しんでいた。そして

外出して来たと思うと、すぐに阿片を気持ちよき

そうに吸っていた。清美は、その人たちにもなつ

いていて、私が敦華を抱いて母乳を飲ませている

傍に、おとなしく座っていた。敦華も私の顔を見

上げて、にこっと笑うようになっていた。私は平

穏な中にいた。しかし日本人引揚げが始まり、置

いてけぼりにされないかという不安がいつもあっ

た。私はときどき太々の許しを受けて、収容所の方へ様子を見に行った。

八月二十八日、私たちのチチハル引揚げの日が

決まった。李夫妻は日本国内の惨状を語り、残留

するよう勧めた。ご恩はあったが、私は帰りが

かった。私の気持ちを知らず、夫妻は四十五日間

の給料までくださった。それも、そのころチチハ

ルではソ連軍票が出回っていたが、それよりも満

州全土で使えるという満州紙幣をかき集めてきて

四百五十円もの大金であった。そして太々は敦華

を抱いて、チチハル市西門まで送ってくれた。別

れるときは握手も交わしたが、そのときの手の温

もりは、私は生涯忘れることはできない。収容所

では多くの人が死んだ。幼児はほとんど亡くな

り、また孤児になった。私たち母子は、李家のお

かげで命をつないでいたのだった。

引揚列車は無蓋車だった。一つの貨車に何十人

も詰め込まれた。妹の偽装結婚でM氏の家族にさ

れている私は、興亜開拓団の人たちとは別れ別れ

になってしまった。列車は走り出したと思えば止まり、止まっては走り、止まる度に死者が降ろされ捨てられた。その遺体に野犬が集まり鳥が群がった。引揚列車では何を食べていたのか記憶にない。ひもじさだけを覚えてる。生きて帰りたいと思いつながら、死んでもいいとも思うようになっていた。水だけでも十分飲みたかった。井戸水は、少し飲んだだけでも下痢をするので飲めなかった。死者を捨てに行く人について行って、野原にしゃがんだ。そこには、銃を構えた中国兵が立っていて追い立てられた。用を足しながら逃げた。

チハルを発つてからの清美は、横たわっている私の乳房にしがみついていたが、日に日に衰弱していった。「清美死んだらあかんで、死ななくてや」と、言葉もまだ分からない子供に言っていた。死んだら野に捨てられる。わが子を異国の野に捨てたくなかった。鉄橋が破壊されていて、船の順番を待ったため何日も野宿をしたこともあ

る。早く妹とともに帰りたい。が、偽装結婚させられたままの妹は、解放してもらえなかった。

私は単独行動をとった。引揚船が出る葫蘆島コロボ近くの錦泉収容所へ着いたのは、九月も半ばだった。私の周囲には誰も知った人はいず、頼る人はなかった。引揚船に乗る順番がきたので行ってみると、清美を見た係官から何日かあとにくる病院船に乗れといわれたのでそれに従うことにしたが、病院船が本当にくるのか気が気ではなかった。ようやく病院船がきたので並んでいると、今度は保護者がついているのだから普通船でいいと言われた。清美は衰弱するばかりだった。「死なんといてや、死んだらあかんで」と念じながらも、引揚船で死んだら水葬される、死んだらお念仏だけでも唱えてやりたいと思い、ろうそくと線香を買った。引揚船では日に二回のめしあげがあった。「めしあげ」の声がかかると、清美は私の乳房にしがみついていた顔をあげて、早く取り

に行くよう私を促した。与えられた食事はうすい高梁粥。栄養失調の幼児には下痢をするばかりだった。それでも清美は生きていた。

四 帰国

「引揚者の皆様、長い間ご苦労さまでした」と書かれた横断幕の掲げられている佐世保の港に入ったとき、私はまだ生きている清美を抱きしめ、生きて帰って来た喜びに涙が溢れた。しかし検疫の結果、船は沖の方へ一週間ほど隔離されていた。それからの上陸だった。援護局でいただいたパンのおいしかったこと、忘れられない。南風崎から乗った汽車が山陽線に入ったころ、大勢の人が乗り込んで来た。その人たちはヤミの担ぎ屋だということはまだ知らなかったが、その中の一人が、私たち母子に真っ白なご飯のおにぎりを恵んでくださった。清美には生まれて初めてのお米のご飯だった。そのおいしそうな顔も私には忘れられない。

昭和二十一年十月十五日の夜、故郷へ帰った。

瘦せ衰え、ぼろぼろの衣服をまとった母子の姿を誰にも見られなくなかった。帰って来た母の家は食糧難に喘ぎ、汽車の中でもらったようなお米のご飯ではなかった。清美は、その三カ月後、昭和二十二年一月九日、死んだ。故郷の土にしてやれたことだけが、せめて私の慰めだった。その半年後、清美の父親、すなわち夫が復員して来た。だが、食糧難につけこむ貧欲な舅と、その息子である夫。清美を亡くした私は、そんな家庭に馴染めず、昭和二十三年に離婚した。

私は出戻り娘になり、再び製紙女工になった。しかし、出戻り娘の肩身は狭く、昭和二十八年、満州時代の友を頼って神戸へ行った。引揚者の友夫婦は会社の寮住まいだったが、引揚者同士の友情は堅く、そこに一年ほど居候させてもらった。そこで現在の夫を紹介され、再婚したのは翌二十九年十二月四日だった。復員者と引揚者同士が京都で世帯をもった。夫はトラック運転手。貧困による食糧難と住宅難だった。最初は頭がつかえる

ような屋根裏に間借りした。そこで長男が生まれた。子供が生まれると、そこから追い出された。今度は三軒長屋のバラックに住んだ。共同ポンプに共同便所。そこで長女が生まれた。家が欲しかった。二十五万あったらちょっとした売家が買えたが、そんな金はなし。市営住宅も府営住宅も申し込んだが抽選に外れてばかり。その上、住んでいたバラックは家主の借金の抵当になっていたので、貸し主から明け渡しの内容証明書がきたりして、店子一同が金を出し合って買い取った。そのとき、わが家は八万円出した。家が欲しかった。夫は、長距離トラック運転手になり、トレーラーの運転もできるようになって稼いでくれた。私は、子育てしながら和服の仕立物に励んだ。それは幾らにもならなかった。

昭和四十二年、長男が六年生になり長女が四年生になった年、私は勤め始めた。月給は一万五千円もらえた。翌四十三年、皇居の歌会始に詠進した私の歌が入選し、夫婦で参内した。そのころか

ら、運が向いてきたように思う。その年、三百五十万の建売住宅を買った。ローンは組んだが二年ほどで返済した。子供が成長してくると、もう少し広い家が欲しくなった。昭和五十二年、現在の家を千七百万で購入した。十年前、三百五十万で買った家が一千万で売れたからである。

私は、昭和五十八年、六十三歳になるまで勤めた。学歴も技術もない私は、板硝子工場の現場で働いていたのである。その間に二人の子供は公立高校を卒業し、長男は京都大学法学部を出て、郵政省へ入り東京へと出ていった。長女は高校から京都市役所に入り、勤めながら大学を出て中学校教師になった。

私は退職した年、仲間たちと「日中友好訪中団」として、中国東北部、満州の現地へ慰霊に行ってきた。私たちのいた開拓地は、一望水田地帯になっていて青田がそよいでいた。退職後の私は、嫁いだ長女の家へ通い、孫の世話などしていたこともあったが、七十代に入ってから、もっ

ばらボランティアに励んだ。町内の公園掃除を任せてもらったり、老人福祉センターのディサービスへ行ったり、中国残留孤児、残留婦人の支援活動もした。肉親探しに来日した孤児の歓迎会にも行った。肉親の分からぬ孤児が、「マーマのようだ」と私に抱きついて泣いた。私は死んだわが子を思った。残留婦人の帰国者から、「日本語を忘れないように独り言は日本語で言っていた」という話を聞き、涙が止まらなかった。

戦争の悲劇は、半世紀以上を経てもなお続いている。平和を願い反戦を訴え続けていても、いっもどこかで戦争がある。難民ができる。悲しいことである。

私はもう八十二年余りも生きてきた。苦難の前半生だったが、後半生はほかの誰よりも幸せだった。その幸せを思うとき、私は満州の広野に屍を曝した同胞を思い出す。この体の命終わったとき、一片の骨、一掬すくいの灰になるのだったら献体しようと思うようになった。夫も二人の子も同意

してくれた。私の死後の遺体は京都府立医大へ献
じることになった。